

令和元年度 第2回栃木市総合教育会議 会議録

1. 日 時 令和元年10月7日(月) 午後2時00分～午後3時30分

2. 場 所 栃木市役所 議会会議室

3. 出席者

(構成員) 大川秀子 市長、青木千津子 教育長、後藤正人 委員、荒川律 委員、
福島鉄典 委員、西脇はるみ 委員、大橋孝子 委員、林慶仁 委員

(事務局) 小保方 総合政策部長、増山 総合政策部副部長兼総合政策課長、
川津 教育部長、鵜飼 生涯学習部長
江面 教育総務課長、大阿久 参事兼学校教育課長
佐藤 生涯学習課長、
毛塚 教育総務課主幹、早乙女 教育総務課課長補佐、
高瀬 学校教育課副主幹、他担当職員

4. 内 容

(1)開 会

(2)あいさつ

○大川市長

日頃より市政運営、教育行政にご協力いただきありがとうございます。

先週、市内幼稚園、保育園の運動会が各地であり、10月にしては暑い中でしたが、子ども達が元気に参加していました。先々週は、小中学校の運動会があり、委員の皆様にはご参加いただきありがとうございます。幼稚園や保育園から比べると、小学生の成長は早く、中学生になるとたくましくなり、短い年数で、心も体も成長するということを考えると、成長期に教育を行う行政や学校の関わる部分は大きいものがあります。運動会を通して、不登校の子どもが学校に復帰できているとの話を聞き、イベントを通じて学校が楽しく思える子ども達もいると感じました。楽しいことに関わることは、子ども達が学校を好きになることになりますので、行事も大切にしたいと思います。

市内高校生による合同文化祭が開催され、空き蔵を活用して、高校生が日頃の活動を発表しており、高校生も一生懸命頑張っていると感じました。

小山市長から、栃木市は若い人が頑張っている、若い人の顔が沢山見えると言われましたが、私もそう感じています。若い人の顔が全面的に出てきており、これからの栃木市を担う若い人たちが街を考え、自分達が気づいたことを行動してくれているのは、うれしい限りです。

中学生が夏のイベントにブースを出して、そこでの益金を生徒会が市に持ってきていただくなど、社会貢献を考える子ども達に育ってくれていることをありがたく思うと共に、子ども達の心を育てている各学校に感謝いたします。

本日は、部活動指導員導入後の活動状況と効果、それから、スクール・サポート・スタッフの導入を開始して半年になりますので、その状況と成果について共

通理解を図りたいと思います。また、とちぎ未来アシストネットとコミュニティ・スクールの取り組みが充実してきているということで、全国の研究大会を栃木市で開催することになりました。大会に向けて皆さんにご協力をお願いすることになると思いますので、よろしくお願いいたします。

(3) 協議・調整事項

① 部活動指導員等導入後の活動状況と効果について

○事務局

※資料により説明

○大川市長

事務局より説明がありました。皆さんからご質問、ご意見をいただきたいと思っています。

○福島委員

スクール・サポート・スタッフは、生徒・児童数が多い学校の事務的な仕事のサポートという意味合いが強く、学校に限られると思いますが、部活動指導員はどこの学校にも部活があり、専門的な指導が出来る先生は限られていることから、スクール・サポート・スタッフと比較して需要があり、働き方改革に寄与すると思います。人材確保など難しい面もあると思いますが、市としてどのくらいの予算を確保する予定ですか。

○大川市長

令和2年度は8名、令和3年度は10名ということで、徐々に増やしていく方向で考えています。予算がないから出来ないではなく、必要なものは実施していかなければならないと考えています。

○福島委員

需要はありますか。

○大川市長

あると思います。競技経験、指導経験のない先生が顧問を務めており、子ども達が十分に力を発揮出来ないことがありましたので、部活動指導員により子ども達の力を発揮出来るような指導が行えることは、とても良い事業だと思います。

○青木教育長

予算については、国と県も関係していますので、それぞれの配分について説明してください。

○事務局

予算については、国、県、市が3分の1ずつ負担することになっています。国の予算を受けて、県が人数を決め、その中で各市町が要望を出して、最終的に県が市町の人数を決定しますので、要望の全てが叶うのは難しいと思います。

○大川市長

スクール・サポート・スタッフは、国の制度はありますが、県が行っていないので、国の補助が受けられない状況です。国としては、県が実施しないと、市町

への補助は出ないということです。県へ毎年要望しているのですが、理解していただけると、スクール・サポート・スタッフも増員出来ると思います。

スクール・サポート・スタッフの県内の状況はどうなっていますか。

○事務局

近隣では、小山市で数名配置しています。スクール・サポート・スタッフに近い存在として栃木市では、図書館事務職員を各校に1名ずつ配置しており、主に図書館業務ですが、事務的な補助を行うことは出来ます。しかし、事務的なものはスクール・サポート・スタッフが行うことが理想だと思います。日光市がスクール・サポート・スタッフを全校に配置しましたが、日光市では図書事務職員を配置していません。名称が異なりますが、補助員を採用している市町もあります。

○林委員

部活動指導員5名の内、2名が都賀中学校に入っており、偏りがあるように思います。

○事務局

校長会を通じて、予算的には5名ということの説明して、募集を行いましたところ、5名の希望があった状況です。子どもに関わる業務ということで、学校とすると信頼できる方でないと、お願い出来ないということで慎重に考えられていると思います。

○大橋委員

都賀中の経緯は、顧問の先生が専門ではなく、審判も出来ないような状況だったので、保護者が県の外部指導の登録制度を利用して、専門の先生に来ていただいていました。その後、今の指導員の先生に来ていただいています。指導が出来ない先生が続いていたので、部活動指導員の制度が出来て良かったと思いますし、他の学校でも利用できれば良いと思います。県のような登録制度を市でも行うことは出来ないですか。

○事務局

本来であれば、登録をしていただき、その中から学校の希望により、紹介出来ればと思っておりましたが、スポーツ振興課等に問い合わせしましても、登録制度がありませんでした。県では部活動補助員という制度があり、4名の方は補助員を務めていた方です。学校に関わっており、子ども達との関係、先生達との関係も分かった上で、校長先生から推薦いただき、今年から部活動指導員になっていただきました。今年度も部活動補助員は十数名の方が各中学校の部活に入っていますので、来年度以降については、アシストネットの活用も含めて、登録制度を考えていきたいという構想です。

○大川市長

来年度増員する計画で、人材確保が重要になりますので、登録制度があると便利だと思います。

○後藤委員

他の都市では、生徒数が少ない、顧問の先生がいないという状況ではなく、日常から補助員をつけている学校があります。本市では、喫緊の課題として顧問がいないと部活動が成り立たないという危機的な側面もあると思います。本市では、

部活動の在り方に関する方針を定めており、その方針に沿って進めることは大切なことですが、将来的には学校教育という立場で、国が部活動についてどう考えているのかだと思います。学校教育の枠の中で出来るものなのか、それとも、社会教育の一環として移管していく方針なのか、国の舵取りを待たないと出来ないのでは、期待したいと思います。

スクール・サポート・スタッフの職務内容は、教材プリントの印刷やアンケートの集計、配布物の仕分けであり、教員が行ってきたことです。効果の欄を見ると「助かった」とのコメントが多いが、「助かった」の解釈が「楽をしてよかった」ではなく、「教材研究の時間が生まれた」、「授業の準備が今まで以上に出来た」、「先生方の指導力が上がった」ということであれば良いです。他の市では、スクール・サポート・スタッフが定着した後に、先生方の指導力が落ちてしまったとの統計結果もあります。職務内容について、最終的には、先生方の指導力が向上していくことを考えていかなければいけないと思います。

○大川市長

本来の目的が失われては、費用をかけて導入しても何にもならないということですので、しっかり検証しないといけないと思います。

②「とちぎ未来アシストネット」と「コミュニティ・スクール」の充実について ～全国コミュニティ・スクール研究大会 in 栃木に向けて～

○事務局

※資料により説明

○大川市長

事務局より説明がありました。皆さんから質問、ご意見をいただきたいと思えます。

○福島委員

岩舟中学校の事例紹介がありましたが、岩舟中学校が荒れていた時期より後の事例ですか。

○事務局

平行して行っていました。少しずつ成果が見られてきたと思っています。

○福島委員

岩舟中学校が荒れていた時は授業にならずに、校内で自転車に乗っていたり、食べ物を食べていたり、携帯を見ている生徒がいました。アシストネットは、学力向上に寄与していないとありましたが、子ども達の心の成長や学校が落ち着くということでは、効果があると思います。栃木市が誇る取り組みだと思いますので、こういうことをやったからこうなったという事例を集めて発信していくべきだと感じます。シンポジウムでも、普通の子どもが勉強できなかった環境が、大人が学校に入り、劇的に変わったことをアピールすることは必要があり、大切なことだと思います。

○大川市長

地域の人たちが学校に行こうということ、ボランティアルームに地域の人が詰めて、真剣になって関わってきました。しかし、それは時間がかかることで、あきらめずに学校づくりを地域の人がやってきた成果だと思います。そういう事例があったので、地域の人が学校に関わる機会が出来たと感じています。研究大会の際には、各学校にも事例があると思いますので、少しでも多く発表できる機会になれば良いと思います。全44校にコミュニティ・スクールがあることは、栃木市として自慢できることだと思いますので、事例を発信できることもあり、栃木市で自信をもって研究大会を開催できると思います。

○福島委員

岩舟中学校がここまで良くなったことにびっくりしました。

○大川市長

岩舟中学校の生徒が介護施設などで手伝いをしています。地域ぐるみで、色々なところに中学生が関わっています。それぞれの地域、学校のやり方があると思うので、地域に合った取り組みをしてもらえると良いと思います。吹上小学校では、地域の歴史を、地域の方が教えています。自分が住む地域を知ることが、地域を好きになる人を作ると思います。色々な方法があるので、地域毎に地域の良さを生かしていければ良いと思います。

○青木教育長

荒れている学校を地域に開くことは、校長として勇気がいることです。地域の人に見てもらい、実態を知ってもらって、協力してもらえることは協力してもらおうと思ったことが大切なことだと思います。ボランティア交流会での岩舟中学校の実践発表にて、地域の人が入ると先生も緊張感をもって授業に臨むので、それも効果があったと話していました。岩舟中学校はアシストネットの効果があった学校の一枚だと思います。びんご府中の全国大会で、コミュニティ・スクールで地域の力を借りることは、漢方薬のようなもので、即効性はないがじわりじわりと効果が出てくるとの話があり、私も常々そう思っています。市ではアシストネットを取り入れて8年目になり、導入当初は、教員も地域の方とやり取りや、打ち合わせの時間が面倒くさいなどの反応もとあったと思いますが、段々、ボランティアに入ってもらうことで、子ども達が生き生きして、授業も活性化し、先生たちも助かるとの効果が表れてきました。打ち合わせの時間も慣れてくるとコンパクトになってきて、今では、地域コーディネーター、学校コーディネーターのやり取りの中で、スムーズに展開できてきていると思います。その土台があってコミュニティ・スクールを導入しましたので、多少の温度差はありますが、効果は出てきていると思います。

○後藤委員

学校や地域をPRすることは重要ことだと改めて感じました。FMくららで、市長が栃木のPRをしていました。FMくららも良いが、是非、民放でも市長がお話をすると良いと思います。横浜市の林市長はニッポン放送で毎週行っています。宣伝する、PRすることを栃木の方は恥ずかしながら、とても大切なことだと思います。

地域の人々の力を借りるだけでなく、学校も地域に積極的に出ていかないとい

けないと思います。学校が困った時だけ、地域に助けを求めることは虫のよい話なので、互恵関係があるようにしないとどこかで行き詰ってしまうと思います。

ボランティアの人が、熱が入ってきて、授業の準備に一生懸命になって、カリキュラムにない内容を行う姿を見て、打ち合わせの時間が鍵だと思います。打ち合わせを真剣に行って、授業の内容を学習支援の方に伝えないと、指導者が変わって、刺激的で楽しい程度のものでなくなってしまいます。最終的には、子どもの学力向上と先生の指導力向上です。先生方も地域の方が来ると刺激になります。打ち合わせをすることは、実は教材研究で、打ち合わせをすることで先生方の指導力が高まっていきます。本日の説明には打ち合わせの話がなかったと思いますが、先生と学習支援に携わる方との打ち合わせをどの程度、どのように行ったのか、恒常的に行ったかをはっきり明示していかないと、お願いするだけになってしまうと思います。

○大川市長

関わる人の自己満足に終わってしまってはならないということがあります。先生方との打ち合わせを行うことが肝心ですので、打ち合わせをする時間が必要だと思います。

○青木教育長

授業の狙いを共有しないといけないと思います。ボランティアの方はあくまで支援ですので、丸投げではなく、この場面で支援してくださいなどの打ち合わせをしないと授業の中に効果的な支援は得られないと思います。打ち合わせは命だと思いますし、慣れてくるとスムーズにいくようになると思います。

○大川市長

学校も地域の方を受け入れることに抵抗はあると思います。校長先生が困っている場面を見て、学校に入る側の配慮も必要と感じています。学校だけでは出来ないことですので、上手く関わってもらいたいと思います。

○西脇委員

赤麻小学校から部活動でフラダンスを行いという話をいただき、昨年、4年生以上の女の子に教えるお手伝いをしました。藤岡の文化祭のステージで、お化粧品をして衣装を着て披露しましたが、子ども達の顔がとても嬉しそうでした。教える方も楽しかったですし、子ども達も良い思い出になったと喜んでいたことが嬉しかったです。

○荒川委員

アシストネットの成果と課題で、「児童生徒の学力が向上傾向にある」が小学校で16.7%、中学校では0%となっています。学校内での生活態度が良くなったことなども含めて学力だと思いますが、そうではなく、学力とはテストの点数などでとらえていますか。

○事務局

事務局としては、学力とはテストだけでなく幅広く考えています。

○青木教育長

ペーパーテストで測れるということで、このような結果になっていると思います。ペーパーテストだけで測れることだけが学力ではなく、生きる力の一要素で

すので、生きる力を育むこともあると思います。

○林委員

栃木市のコミュニティ・スクールは小中学校だけだと思いますが、びんご府中大会の第4分科会で「高校・特別支援学校におけるコミュニティ・スクールの役割」とありますが、栃木大会でも対応出来るのですか。

○事務局

研究大会の実施に向けては、実行委員会を組織して進めていくことを考えています。びんご府中大会では、高校・特別支援学校が入っていますが、栃木市では、小中学校の学校運営協議会の代表者などに参加していただき、文部科学省の担当者とも連携しながら、一番良い形を考えていきたいと思っています。

○青木教育長

広島県の教育長が、広島県でコミュニティ・スクールが普及していないということで、トップダウンで全高校にコミュニティ・スクールを入れた経緯がありますので、びんご府中大会では第4分科会に、高校・特別支援学校の実践発表を行ったものだと思います。

○大川市長

コミュニティ・スクールに限らなければ、栃木市は高校が充実していて、色々なことに関わっているのです、発表できることは沢山あると思います。

○青木教育長

高校の実践が披露できる形が取れば良いと思います。

○大川市長

高校生蔵部などは、披露できることが沢山あるので、分科会を開催したいという思いはあります。

○青木教育長

高校は、県教育委員会の指導の下に動いており、市が高校にコミュニティ・スクールを設置することはできませんが、栃木市の高校は、地域との連携という意味で頑張っていると思います。

(4)その他

※事務局から次回の日程等について説明を行った。

(5)閉会 (15:30)